様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２８５３

研究課題名（和文）用法基盤モデルに基づく英語ライティング用教材「テンプレート」の開発

研究課題名（英文）Developing a Template as an Effective Tool for Teaching English Writing

研究代表者
八木橋　宏勇（YAGIHASHI, Hirotoshi）

杏林大学・外国語学部・准教授

研究者番号：４０４５３５２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで数多く積み重ねられてきた「日英対照研究の成果」と「英語ライティング教育」を有機的に接続させる基礎研究を行い、最終的には英語ライティング教育で目的・ジャンル別に活用できる「テンプレート」（談話レベルでのスキーマに相当）を構築することであった。これは、母語の談話展開パターンをいったん背景化させ、学習言語の好まれる談話展開パターンを学習者に内在化させる学習支援ツールである。大学生を対象とする教育効果測定では、学習者の習熟度に応じて抽象度の度合いは調整される必要があるものの、談話レベルの英語ライティング教育には「英語らしさ」の度合いを高めるという点で有効性が認められる結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英語を担当する教員であれば「センテンスレベルでは容認可能であっても、文章全体を見ると母語の日本語（の発想）が透けて見える英文」に遭遇した経験があると思われる。より自然な英文を作成するには、センテンスレベルで的確な英文を書く練習だけでは不十分であり、母語である日本語の思考パターンをいったん背景化させ、英語で好まれる談話展開パターンや表現方法に習熟する必要があると言える。
本研究では、様々なジャンルのサンプル英文からスキーマを抽出し、英語で好まれる談話展開パターンを可視化するテンプレートを作成した。これにより中上級者向けの新しい英語ライティング用教材を提供する基盤が整備されたと言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the effectiveness of a template and develop a new approach toward providing instructions for writing in English. The effect measurement for university students confirmed that this tool has a good effect on discourse-level writing training in English, although the abstraction needs to be adjusted according to the proficiency level of the students.
It is said that teachers of English in Japan often encounter many student-written English texts, which are well formed at the sentence level, but these texts make it easy to guess their original Japanese way of thinking at the discourse level. To avoid this, all English learners must become accustomed to the “preferred discourse patterns of English” and express what they want to say by following these patterns and relegating the Japanese discourse patterns to the background. This study demonstrated that a template could guide English learners to produce more natural-sounding English texts.

研究分野：認知言語学・社会言語学・語用論・第二言語習得

キーワード：外国語教育　英語ライティング　用法基盤モデル　テンプレート　スキーマ　好まれる談話展開　好まれる表現方法　言及されることが期待されている情報

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究課題の申請時における研究動向

日英対照研究は、両言語で異なる「好まれる事態把握」「表現パターン」が存在することを、言語構造の様々なレベル（語・文・談話）で検証してきた。「する・なる」（池上 1981）、「人物中心・状況中心」（Hinds 1986）、「話し手責任・聞き手責任」（Hinds 1987）、「客観的把握・主観的把握」（池上 2000）、「ポライトネス・わきまえ」（井出 2006）、「結果志向・過程志向」（多々良ら 2012）のほか、Hall（1976, 1983）や Clyne（1994）は文化とコミュニケーションスタイルを類型化し、言語使用や表現方法を動機づけていると想定される思考体系が言語ごとに異なっている可能性があることを指摘した。

上記日英対照研究の成果を日本の英語教育に活かす試みも数多くなされてきた。学習者は学習過程で目標言語の言語知識（語彙・文法・構文等）を内在化させることを求められるが、形式と意味の対応関係を丸暗記するだけでは情報処理が浅く記憶の痕跡がほとんど残らない。そのため「記銘（coding）・保持（storage）・想起（retrieval）の失敗」を犯しやすくなることも指摘されてきた（相澤 2006）。「[情報]処理が深くなるだけ記憶痕跡がしっかりとして忘れにくくなる」（相澤 2006）と想定する処理水準効果に照らすと、日英対照研究の成果を語彙・文法・構文等の説明の一部に組み込むことは、情報を記憶に押し込む手がかりとしての理解を提供することから、目標言語の言語知識拡充には一定の成果を挙げてきたと言える（今井 2010 ほか）。このような背景から、「日英対照研究と英語教育の有機的接続」を図ることは大いに期待されていたところであり、特に、習得した言語知識を談話レベルでも適切に運用できる英語ライティングに関する効果的な教授法・教材の開発も待たれていた。

(2) 本研究課題を申請した動機

英語ライティング指導において「文法的には間違っていないが、通常このようには言わない」という答案に遭遇することが多い。これは、①「好まれる言い回し（fashions of speaking）」という母語話者が通常用いる表現形式、②言語表現の適切な使用場面（使用域）に関わる理解、すなわち目標言語の各言語知識の使用に際する言語慣習が十分に習得されていないことに起因することは十分に想定された。一方で、英語の言語知識を具備している学習者であっても、談話構築に際してはストレス・とまどい等を覚えることも報告されていた（寺内・小池・高田 2008）。これは、語彙や文法を紡いで談話を生成する過程で必要になる各言語の「好まれる談話展開パターン」に関わる問題であり、日本の英語ライティング教育では十分に関心が払われてきたとは言えない点でもあった。一例を挙げると、伝統的な日本のシラバスは「授業で扱うテーマ」と「授業の進め方」が示される傾向にあるが、一方英語圏のシラバスは「テーマの明示」に加え「履修によって最終的に獲得される能力」の明記がある場合が多いようである。前者は日本語の過程志向、後者は英語の結果志向の表れであると想定される。このように、「表現するための思考」（Thinking for speaking / writing）には言語ごとの好みが観察される。英語学習者は語・文・談話いずれにおいても言語の慣習的側面に習熟することを求められていることから、英語ライティング教育には談話の鋳型であるテンプレートを利用することが有効であると想定されたのである。

(3) 従前の研究成果との関係

研究代表者は、認知言語学の立場から日英語の定型的側面（慣習性）と定型からの逸脱（創造性）に関する言語現象を研究してきた。その過程で、言語研究と英語教育の接点として注目していたのが「用法基盤モデル(usage-based model)」であった。言語知識の具体的な使用に繰り返し接するとトークン頻度が上がり、個別事例から帰納的にスキーマ（各表現形式の安定性を担保する定型的鋳型）が形成される。今度はそのスキーマが演繹的に活用されることで新しい経験を適切に表現することができるようになると想定される。用法基盤モデルは、Tomasello (2004) 等の研究により、母語獲得研究においては説得的な成果をあげていることは知られていたが、日本における英語教育、とりわけ談話レベルのライティング教育への応用は試みられておらず、先駆的な研究であったと言える。

２．研究の目的

本研究は、これまで数多く積み重ねられてきた「日英対照研究の成果」と「英語ライティング教育」の接続を図る基礎研究を行い、最終的には英語ライティング教育で目的・ジャンル別に活用できる「テンプレート」（談話レベルでのスキーマに相当）の構築を目指すものであった。具体的な目的として、次の下位目標が設定されていた。

(1) 英語ライティング教育における新しい学習モデルを構築することを前提に、従来の日英対照研究の成果を談話レベルで再検証する。
(2) 認知言語学の「用法基盤モデル」を理論的基盤とする「テンプレート」の作成・検証・修正を通して、従来の日英対照研究と英語教育を有意義に接続するツールの開発を行う。

(1)に関しては、主として文レベルで論じられることが多かった日英対照研究の成果を、談話

レベルでも検証し、好まれる事態把握・表現パターンが同じように確認されるかどうか検証した。さらに、談話を構成する各情報や談話展開に影響すると想定される「結果志向・過程志向」「話し手責任・聞き手責任」「ポライトネス・わきまえ」を中心に、アカデミックライティング・エッセイライティングをはじめとする様々なジャンル（批判や説得といった談話種別も含む）の英文をサンプルとし、そのスキーマを抽出する作業を行った。

(2)に関しては、(1)で使用した英語の談話を下敷きに、英語ライティング教育で試行するテンプレートを作成した。テンプレートとは、個別事例の蓄積から一般化された談話の鋳型であり、新しい経験を語る際に思考を形式的に支援する役割を担うと同時に、テンプレートの誘導によって思考パターンが制約されるという道具の二面性も持ち合わせている（菅井 2015）。テンプレート作成に際しては、この特性を活用することにより、目標言語の「好まれる談話展開パターン」を学習者に内在化させることができると見込まれた。つまり「好まれる談話展開パターン」に誘導する形でテンプレートを構築し、テンプレートを活用した演繹的な演習を繰り返すことで習得対象の談話展開パターンが帰納的に学習者に内在化されていくと予測されたのであった。形式的に思考を支援するテンプレートは、英文産出過程で思考が母語のパターンに傾くことを回避しながら、目標言語の思考パターン習得を促す矯正ギブスのような役割を果たすことが期待された。

②スキーマの形成

↑　　↓

①個別事例の蓄積　　③新しい経験への適用

（菅井 2015:82）

本研究は、①日英対照研究の成果と用法基盤モデルが英語ライティング教育に応用されること、②英語教育を視座に据えて日英両言語を再観察することで、先行研究の理論的妥当性や教育への適応可能性の追求（場合によっては修正案の提案）が可能であること、③英語ライティング学習モデルを教材の形で提供できること、④英語ライティング教育に新しいアプローチを提供することから、welfare linguistics（社会貢献に資する言語研究）の一事例となりうること、が特色として挙げられる。いわゆる「知識詰め込み型学習」で獲得された英語の言語知識を持ち合わせているだけでは natural な英語コミュニケーションを展開できる保障はない。本研究の意義は、上記テンプレートを使用した英語ライティング演習を行うことで、「好まれる談話展開パターンに則った言語知識の適切な使用」にアプローチすることができ、知識をスキルにまで昇華させる教授法・教材の提案が期待できる点にあった。したがって、学習者の英語運用能力の熟達化に資する学習ツールであることを質的に検証することも目指していた。

３．研究の方法

研究は以下の手順で遂行された。

(1)主として文レベルで行われてきた日英対照研究の成果を整理し、英語ライティング教育へ応用することを前提に「談話レベル（ジャンル別・談話種別）」でも同様の傾向が観察されるか基礎研究を行う。
(2)上記基礎研究を基盤に、日英対照研究と英語ライティング教育を接続するツール「テンプレート」を作成する。このテンプレートは中学校・高等学校・大学の教育現場で随時試用され、テンプレート自体の質的検討を継続的に加えつつ、その活用方法や教育効果の検証も行う。
(3)上記試行と検討・検証に基づき、利用頻度や教育効果が高いと想定されるテンプレートを順次教材として公開する。

本研究は、言語研究（認知言語学・社会言語学・語用論・第二言語習得論）の専門家のみならず、英語教育に携わる現役の中学・高等学校教員も参画することで、多角的な議論と英語教育現場でのスムーズな研究遂行が図られるよう考慮し実施された。言語研究は、学際的研究の推進により近年急速に発展しており、また英語教育においても挑戦的な試みが絶えず為されていることから、各々が専門分野の最新動向を把握し、相互に情報を提供し合うことで、より高度な研究を遂行することを可能にした。

４．研究成果

本研究は、これまで数多く積み重ねられてきた「日英対照研究の成果」と「英語ライティング教育」の接続を図る基礎研究を行い、最終的には英語ライティング教育で目的・ジャンル別に活用できる「テンプレート」（談話レベルでのスキーマに相当）の構築を目指すものであった。主として大学生を対象に行った教育効果測定では、学習者の習熟度に応じて抽象度の調整は必要

であるものの、総じて、語彙や文法といった英語に関する一定水準の言語知識を具備する中上級者には、テンプレートは英語らしい英文を作成する上で有効性が確認された。各年度で実施した研究成果の概略は次のとおりである。

(1)2016 年度

様々なジャンルのパッセージをもとに、英語と日本語の因果関係の表現方法と好まれる談話展開パターンを検証し、従来の日英対照研究の成果の整理・再検証を行った。また、英語学習者がライティングに際して陥りやすい困難として「因果関係の表現方法」を集中的に取り上げ、英語の結果志向・日本語の過程志向の観点から英語学習者のライティング答案を検証した。

例えば、日本語では接続関係を明示することなく、情報を単発的に羅列することが許されがちであることから、点的論理が垣間見られる答案が多くあった。これは、論理関係を明示して話題を膨らませる英語の線的論理に習熟していないことに起因する母語の負の転移に関わる問題と考えられ、英語学習者の多くが目標言語の談話展開に関する言語慣習に未習熟であることを明らかにした。

(2)2017 年度

「好まれる情報の配置・展開」という観点から、英語学習者の「英語力」と「論理的思考力」には、相関関係があるのかどうか調査を実施した。主として用いたのは、一定の英語の知識を具備していても論理的思考力を作動させなければ適切な解釈には到達できない英文の解釈、（機械的な解釈では論理が破綻する）百科事典的知識に基づく適切な理解が求められるクジラの構文の解釈、センテンス間の論理関係を適切に結ぶ接続詞を選択する問題であった。結果、学習者の英語力と論理的思考力の間には、一定の相関関係が確認されたものの、後者の涵養には適切な英文を用いた意識的なトレーニングを要することも明らかとなった。

これを踏まえ、前年度に引き続き、英語と日本語の因果関係の表現方法と好まれる談話展開パターンを検証した。英語学習者がライティングに際して母語の談話展開パターンに陥りやすい「因果関係」の表現方法を検証することを通して、「英語の結果志向／Because 型談話展開」・「日本語の過程志向／Therefore 型談話展開」の観点から英語学習者のライティング答案を質的に検証することも実施した。その結果、母語の思考パターンをいったん背景化させ、学習言語における好まれる談話展開パターンや表現方法を学習者に内在化させるには「テンプレート」（菅井 2015）の活用が有効であることを再確認した。

(3)2018 年度

「センテンスレベルでは適格な英文を書くことができる学習者であったとしても、文章を作成するとなると、母語である日本語が『透けて見える』英文に陥ってしまうのはなぜか」という問題意識のもと、用法基盤モデル・メンタルコーパスという観点から、「日英対照研究の成果」と「英語ライティング教育」の接続を図る基礎研究の深化を目指した。また、英語ライティング教育において目的・ジャンル別に活用できる「テンプレート」（談話レベルでのスキーマに相当）を作成することを通して、研究成果の社会的波及も意識して研究が遂行された。

2018 年度は、より一層様々なジャンルの英文からスキーマを抽出（＝テンプレート化）するとともに、作成済みのテンプレートを活用したライティング教育の効果測定を行った。前年度から継続実施している「英語の結果志向／Because 型談話展開」・「日本語の過程志向／Therefore 型談話展開」を中心に、英語学習者のライティング答案を質的に検証することで、各テンプレートの改訂版作成を随時実施した。このテンプレートの精緻化作業を通して、母語である日本語の思考パターンをいったん背景化させ、学習言語（＝英語）における「好まれる談話展開パターン」や「好まれる表現方法」を学習者に内在化させるには、（知識としての「好まれる談話展開パターン」や「好まれる表現方法」をスキルにまで高めるうえで）ボトムアップ的に構築された「テンプレート」（菅井 2015）の活用が一助となることが再度確認された。

(4)2019 年度

前年度に引き続き、様々な英文からスキーマを抽出（＝テンプレート化）するとともに、テンプレートを活用したライティング指導の効果測定を行った。その過程で、ジャンル・トピックに特有の「好まれる表現方法」「言及されることが期待されている情報」が存在することが浮き彫りとなった。例を挙げると、西嶋（2017）は、交通事故を報じるドイツ語の新聞記事は「物損の程度を金額で言及」するという特徴があることを指摘している。このような「言及されることが期待されている情報」に関して、母語と目標（学習）言語に相違が認められる場合、それを知らなければ適切に情報を提示できないこととなるため、意識的な学習が求められる。テンプレートを使った学習・指導は、英語らしい談話展開パターンに加え、ジャンル・トピックに特有な情報を適切に提示するという面でも有用性が確認された。

一方、「テンプレート抽出・利用」は、母語の談話展開パターンをいったん背景化させ、英語

で「好まれる談話展開パターン」「好まれる表現方法」「言及されることが期待されている情報」へと学習者を誘導する効果が認められたものの、固定部とスロット部（学習者自身が記入する箇所）に文体的相違（凸凹感）が出る可能性があることも（英語を苦手とする学習者のデータから）確認された。この点は今後の検討・対応課題としたい。

なお、最終年度末の COVID-19 感染拡大の影響により、研究成果の公表に一部遅れが生じた。テンプレートを用いた英語ライティング教材を大学用／一般向け英語テキストとしてまとめることも含め、残された成果の公表は 2020 年度以降随時行っていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 八木橋宏勇・宮﨑太樹	４．巻 7
２．論文標題 オーラルアプローチを用いた英語授業―公立中学校における４技能の育成を目指して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 杏林大学教職課程年報	６．最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 植野貴志子・井出祥子	４．巻 なし
２．論文標題 “Ｉ”と”You”が，なぜ言えないのか？―日英語の根源的異なりの一考察―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語学習と教育言語学：2019 年度版	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 植野貴志子	４．巻 1-1
２．論文標題 会話におけるストーリーの共創	５．発行年 2019年
３．雑誌名 共創学	６．最初と最後の頁 51－56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hanks, William, Sachiko Ide, Yasuhiro Katagiri, Scott Saft, Yoko Fujii, Kishiko Ueno	４．巻 145
２．論文標題 Communicative interaction in terms of ba theory: Towards an innovative approach to language practice	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Pragmatics	６．最初と最後の頁 63－71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 八木橋宏勇	４．巻 31
２．論文標題 英語ライティング指導におけるテンプレートの活用―日英語の好まれる談話展開とその内在化―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 杏林大学外国語学部紀要	６．最初と最後の頁 197-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 多々良直弘	４．巻 10
２．論文標題 メディアスポーツディスコースの対照研究の可能性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 桜美林論考　言語文化研究	６．最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 植野貴志子	４．巻 21巻1号
２．論文標題 日本人とアメリカ人の会話マネージメントはなぜ異なるのか―教師と学生による会話の日英対照―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 社会言語科学	６．最初と最後の頁 64-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 八木橋宏勇	４．巻 8
２．論文標題 〈ことわざらしさ〉と新奇性	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ことわざ	６．最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 八木橋 宏勇	4．巻 49
2．論文標題 言語学は女性と男性をどう見てきたか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 杏林医学会雑誌	6．最初と最後の頁 43～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.11434/kyorinmed.49.43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 植野貴志子	4．巻 36(4)
2．論文標題 日本人の聞き手行動―「融合的談話」を事例として―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 116-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 多々良直弘	4．巻 20(1)
2．論文標題 メディア報道における批判のディスコース－スポーツ実況中継において日英語話者はどのように批判を展開するのか－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 71-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 八木橋宏勇・植野貴志子・多々良直弘・野村佑子・長谷川明香・工藤貴恵	4．巻 34
2．論文標題 日英談話対照研究に基づく英語ライティング用教材の開発	5．発行年 2017年
3．雑誌名 杏林大学研究報告―教養部門―	6．最初と最後の頁 97-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 八木橋宏勇
2．発表標題 メディアとことわざ
3．学会等名 ことわざフォーラム2019（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 八木橋宏勇
2．発表標題 聖書の対照研究
3．学会等名 第44回社会言語科学会研究大会（ワークショップ「社会言語科学における対照研究の可能性」 ）
4．発表年 2020年

1．発表者名 植野貴志子
2．発表標題 日米女子大学生の言語行動と自己対社会観―「ミスター・オー・コーパス」をデータとして―
3．学会等名 第44回社会言語科学会研究大会（ワークショップ「社会言語科学における対照研究の可能性」 ）
4．発表年 2020年

1．発表者名 植野貴志子
2．発表標題 会話における共創の諸相―「融合的談話」を事例として
3．学会等名 計測自動制御学会 システムインテグレーション部門共創システム部会 第34回共創システム部会研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 Ueno Kishiko
２．発表標題 Why teachers ask more questions than students in dyadic conversations: An interpretation of wakimae utterances using babased thinking
３．学会等名 The 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 〈ことわざらしさ〉と新奇性―定型と逸脱のレトリック―
３．学会等名 ことわざ学会2019年3月例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 選手間コミュニケーションの対照研究―試合中の戦術決定はいかになされているか―
３．学会等名 社会言語科学会第43回大会公開シンポジウム「東京オリンピック・パラリンピックと社会言語科学」
４．発表年 2019年

１．発表者名 須藤路子・植野貴志子
２．発表標題 中学校英語科教員と教職課程学生の生成パターンと英語習熟度の分析
３．学会等名 日本音響学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 植野貴志子
２．発表標題 二者会話におけるストーリーの共創：うなずきと相互ひきこみ発話
３．学会等名 共創学会第2回年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 植野貴志子・井出祥子
２．発表標題 日本人のための英語発話モデルの開発：“Ｉ” と“ You ”をどう教えるか
３．学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第49回年次研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 多々良直弘
２．発表標題 メディアディスコース研究の可能性
３．学会等名 HLC「言語と人間」研究会2019年度第2回例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 多々良直弘
２．発表標題 スポーツ実況中継の対照研究
３．学会等名 社会言語科学会第43回大会公開シンポジウム「東京オリンピック・パラリンピックと社会言語科学」
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村佑子
２．発表標題 日本語会話における思考動詞『思う』のインターアクショナル機能―英語会話との比較から―
３．学会等名 共創学会第2回年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 冗長性の文体的要因―母語話者の内省とコーパスデータではなぜ容認度判断に乖離が生じるのか―
３．学会等名 日本文体論学会第111回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 多々良直弘・八木橋宏勇
２．発表標題 日英語の論理的表現方法と学習者の理解度
３．学会等名 日本英語学会第35回大会ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 認知言語学とことわざ研究
３．学会等名 ことわざ学会第94回例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 須藤路子・植野貴志子
２．発表標題 中学校英語科教員と教職課程の大学生における英語力測定と分析
３．学会等名 日本音響学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 植野貴志子
２．発表標題 教師と学生の相補的関係性における役割志向の発話―自己の二領域性のはたらき
３．学会等名 日本語用論学会第20回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 植野貴志子
２．発表標題 初対面会話における役割志向のわきまえの発話―主体と場の相互誘導合致
３．学会等名 共創学会第1回年次大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 植野貴志子
２．発表標題 融合的談話の共創：共振する身体と発話
３．学会等名 第1回共創学研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Naohiro Tatara
２．発表標題 A Contrastive Analysis of Sports Broadcasting Discourse in English and Japanese
３．学会等名 15th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 多々良直弘・八木橋宏勇
２．発表標題 論理表現に注目した日英比較
３．学会等名 第38回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 ライティング答案に現れる英語と日本語の論理
３．学会等名 日本英語学会第34回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 TATARA Naohiro
２．発表標題 A Comparative Study of Criticizing Strategies in English and Japanese Live Football Commentaries
３．学会等名 Sociolinguistic Symposium 21（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 多々良直弘
２．発表標題 スポーツ報道におけるメディア翻訳―グローバル化するスポーツはどのように報道されているのか
３．学会等名 日本言語学会第152回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 多々良直弘
２．発表標題 フットボール・ストーリーと場の理論
３．学会等名 日本認知言語学会第17回全国大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 多々良直弘
２．発表標題 メディア翻訳に現れる英語と日本語の論理
３．学会等名 日本英語学会第34回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 多々良直弘
２．発表標題 メディア翻訳に現れる英語と日本語の論理
３．学会等名 日本英語学会第34回大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計11件

1．著者名 八木橋宏勇	4．発行年 2019年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 376
3．書名 「母語話者の内省とコーパスデータで乖離する容認度判断－the reason...is because...パターンが妥当と判断されるとき－」 In 『認知言語学を紡ぐ』（成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書）（pp．71-89）	

1．著者名 八木橋宏勇	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 448
3．書名 「試合中に戦術を決める選手間コミュニケーションの対照研究」In『ことばから心へ―認知の深淵―（吉村公宏教授退職記念論文集）』（pp．53-63）	

1．著者名 八木橋宏勇	4．発行年 2019年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 864
3．書名 （コラム）「定型連鎖」「メンタル・コーパス」「サピア=ウォーフの仮説」In『認知言語学大事典』（pp．145 630，691）	

1．著者名 西村義樹・長谷川明香	4．発行年 2019年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 376
3．書名 「再帰と受身の有標性」 In 『認知言語学を紡ぐ』（成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書）（pp．71-89）	

1．著者名 植野貴志子	4．発行年 2018年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 336
3．書名 「聞き手行動の「場の理論」による解釈」 In 『聞き手行動のコミュニケーション学』（11-31）	

1．著者名 多々良 直弘ほか	4．発行年 2018年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 348
3．書名 「最新の言語文化研究と社会言語学」 In 『言語の認知とコミュニケーション』（215-301）	

1．著者名 長谷川明香ほか	4．発行年 2018年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 252
3．書名 「認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか？」In 『認知言語学とは何か? ： あの先生に聞いてみよう』	

1．著者名 多々良直弘	4．発行年 2017年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 61-81
3．書名 日英対照言語学シリーズ[発展編]社会言語学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	植野　貴志子 (Ueno Kishiko) (70512490)	東京都市大学・共通教育部・教授 (32678)	
研究分担者	多々良　直弘 (Tatara Naohiro) (80383529)	桜美林大学・リベラルアーツ学群・准教授 (32605)	
研究分担者	野村　佑子 (Nomura Yuko) (20712954)	順天堂大学・国際教養学部・助教 (32620)	
研究分担者	長谷川　明香 (Hasegawa Sayaka) (10779713)	成蹊大学・アジア太平洋研究センター・研究員 (32629)	